

過去 現在 未来をつなぐ埋蔵文化財

No.58

埋文群馬

MAIBUNGUNMA



公益財団法人
群馬県埋蔵文化財調査事業団
<http://www.gunmaibun.org/>

『金井東裏遺跡』

平成25年度の調査

調査統括 友廣哲也

平成24年11月、渋川市の金井東裏遺跡で「甲を着た古墳人」が発見されました。6世紀初頭の榛名山二ツ岳噴火に伴う火山灰や火砕流に覆われ、その後の6世紀中頃に起きた二ツ岳の二回目の大噴火で降下した厚さ2mに及ぶ軽石により完全に埋没していた古墳人が、1500年ぶりに姿を現したのです。

甲を着たままお辞儀をしているかのような姿勢で発見された古墳人、すぐそばで発見された乳児、噴火から逃れようとしていたおおぜいの裸足の人々の足跡、これらは榛名山の噴火直後のようすを現代に伝える衝撃的な発見でした。その後、現地の調査も進み新たな発見が相次いでいます。また、室内での出土品の調査も最新の科学技術により冑が発見されるなど大きな成果をあげています。今号では、その後の調査成果について報告します。

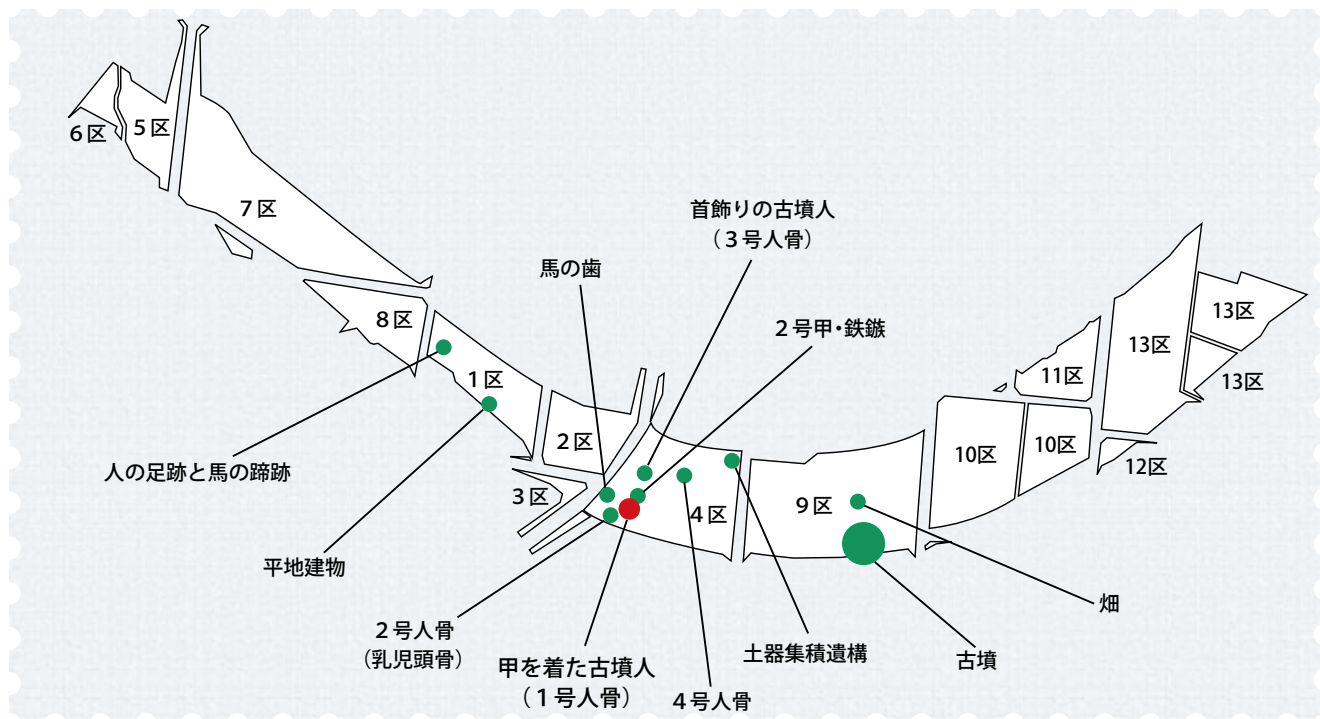


図1 金井東裏遺跡の調査範囲とこれまでに発見された遺構等の位置

金井東裏遺跡で、6世紀初頭の榛名山二ツ岳噴火の際の火山灰や火砕流に埋もれた「甲を着た古墳人」が発見されてから、一年がすぎました。

今年度を実施したCTスキャン調査の結果、頭骨の真下には冑がほぼ完全な形で残っていることも判明しました。「甲を着た古墳人」の装備品の全容が次第に明らかとなっており、大変な話題となっています。

現地の調査でも、「甲を着た古墳人」と同時期の平地建物や道路遺構など、新たな発見が相次いでいます。道路遺構にはヒトの足跡、ウマの蹄跡も残っていました。

その中でも、大変珍しいものとして、4区の祭祀遺構があります(図1の土器集積遺構)。ここからは800個以上の土器と青銅製の鏡、剣、短甲(甲の一種)、鏡の小型石製模造品やガラス玉も出土しました。短甲形石製模造品は県内でも2例目となります。

また、9区の榛名山二ツ岳火砕流の中から、赤玉と呼ばれる赤色顔料を丸く固めた物が、100個以上もまとまって出土しました。県内では、伊勢崎市本関町古墳群、中之条町伊勢町川端遺跡に続く3例目の発見ですが、これほど多く見つかったのは初めてのことです。

■ 3号人骨(首飾りの古墳人、成人女性)

3号人骨は「甲を着た古墳人」から西に約16m離れた31号溝の中で発見されました。九州大学の田中良之教授の指導のもと、現地で調査を行いました。全身骨格が残っていたため、被災状況を復元でき、左足を軸にして反時計回りに回転し、頭を東に向けてうつぶせに倒れたことが分かりました。西方の榛名山から高速で流れ下り襲ってきた火砕流から逃げようとしたものの、それがかなわずに倒れたものと考えられます。(写真1)身長143cmの小柄な成人女性で、石製の管玉とガラス玉からなる首飾りをしていました。



写真1 3号人骨出土状況

(主任調査研究員 杉山秀宏)

■ 4号人骨(幼児)

4号人骨は「甲を着た古墳人」から北西に約30m離れた、当時の地表で発見されました。田中教授の指導のもと現地調査し、頭と右下肢の一部の骨ばかりでなく、土の色の違いから遺体の痕跡をも確認することができました。幼児と考えられ、頭を南東方向に向け、手足を大の字に広げて、うつぶせに倒れたことがわかります。(写真2)

これまでに、金井東裏遺跡からは「甲を着た古墳人」、乳児とあわせて4人の骨が出土したことになります。いずれも同時に被災したものと考えられます。



写真2 4号人骨出土状況

(主任調査研究員 都木直人)

■ 道路遺構と足跡(ヒト、ウマ)

6世紀初頭の榛名山二ツ岳の噴火で、最初に降下した火山灰の上を歩いていた、古墳時代の人々の足跡や馬の蹄跡が見つかりました。

ヒトの足跡を埋めていた火砕流の堆積物をていねいに取り除くと、指先の小さな凹みまで残るものもあり、裸足だったことがわかりました。(写真3)金井東裏遺跡で足跡が見つかった道路遺構は10ヶ所以上あり、火山灰が降下したあとも道が機能していたことがわかりました。



写真3 ヒトの足跡(左足 長さ約23cm、幅は約9cm)

「甲を着た古墳人」が発見された31号溝の周辺でも4号道と名付けた道路遺構(道幅は約1.5m)がありました。4号道路遺構との交差点の31号溝の中から、「首飾りの古墳人」は発見されています。(写真4)首飾りをした女性はここを歩いている時に火砕流に巻き込まれた可能性もあります。

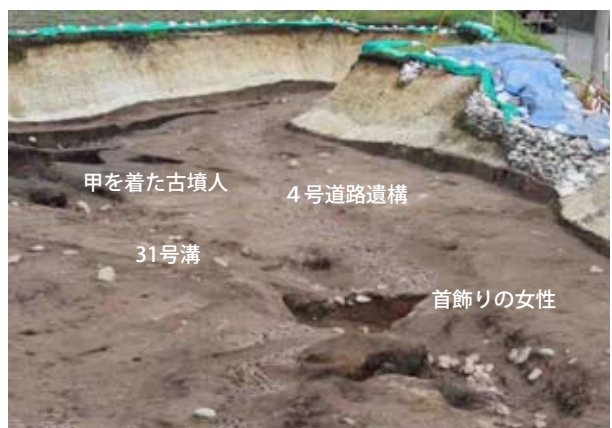


写真4 31号溝と交差する4号道路遺構に残るヒトの足跡

金井東裏遺跡の道路遺構からは、形や大きさの異なるヒトの足跡が700個以上も見つかりました。さらに、ウマの蹄跡もあることから、大人や子どもがウマとともに噴火から避難していた姿が想像できます。

(主任調査研究員 宮下寛)

■平地建物

金井東裏遺跡では、現在まで10棟の平地建物がみつっていますが、これらは地表に建てられたものであるため、発掘調査では詳細な施設を確認できるものは多くはありません。本遺跡の平地建物も石を簡易に組んだ炉や、土器、炭化材片を確認できる程度で、柱穴や壁の痕などは不明瞭のため、構造のわからない建物がほとんどです。

しかし、火砕流堆積物で覆われた1区1号平地建物では、最初に降下した榛名山二ツ岳火山灰が、建物の外では存在するものの、内部では確認されなかったため、火山灰降下では建物は倒壊しなかったことがわかります。さらに、火山灰が入り込まないような、屋根や壁を備えた建物であったことも推定できます。(写真5)

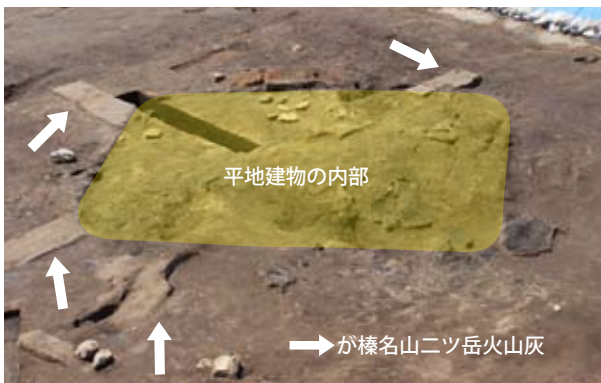


写真5 1区1号平地建物(約5×5.5mの規模)

9区8号平地建物では、床面の周囲に、幅20cm、深さ15cmの溝が巡っていました。ここに板材などでつくられた壁があったかもしれません。さらに、この溝の南側の一部は長さ50cmほどとぎれているので、南辺中央部が出入り口と考えられます。なお、出入り口の外側には火山灰を踏みしめたヒトの足跡が多数残っていました。(写真6)



写真6 9区8号平地建物(東から)

(主任調査研究員 須田正久)

■土器集積遺構

「甲を着た古墳人」から北西に45m離れた当時の地表から、土器や滑石製品などが、足の踏み場もないほど大量に出土しました。おまつりが行われたことを示す遺構が発見されたのです。幅10cmの溝で囲まれた直径5mほどの円形の区画内からは、土師器を主体として、須恵器も含む土器(甕、壺、杯など)が800個以上、青銅鏡1面、滑石製白玉9,500個以上、短甲形石製模造品1個、剣・有孔円板などの石製模造品150個以上、ガラス玉180個以上、石製管玉60個以上、勾玉12個(材質は石、ガラス、メノウ、コハク)等のまつりに使用された器物が出土しました。(写真7・8)



写真7 土器集積遺構の遺物出土状況



写真8 左上から右下に、須恵器配置・円形の区画・土師器杯重ね置き・鏡出土状況・勾玉出土状況・鉄器出土状況

(主任調査研究員 杉山秀弘)

■1号古墳の調査

【墳丘、葺石、周堀】「甲を着た古墳人」の北方約100mの地点で、1号古墳を発見しました。6世紀初頭の榛名山二ツ岳火山灰に覆われ、6世紀中頃の榛名山二ツ岳軽石によって完全に埋もれていたため、軽石の掘削を始めた時点では全く輪郭も見えない状態でした。

円墳で墳丘部の直径が約15 m、高さは1.6 mあります。幅4.2m、深さ0.8mの周堀を含めた直径は約23mとなります。古墳の年代は、5世紀後半と考えられるので、「甲を着た古墳人」よりも前に亡くなった人物が埋葬されたものです。(写真9)



写真9 1号古墳の全景(西から)

墳丘斜面は、火砕流の直撃を受けて、西側の葺石はほとんど失われ、盛土の一部も削られていました。残りの良い南・北面の状況からは、1 mほどの間隔で石を直線的に並べて、墳丘面を縦に区画し、その間をうめるように石を葺く作業工程を復原することができます。(写真10)



写真10 1号古墳の葺石

【埋葬施設と副葬品】 埋葬施設は、南北に並んで2ヶ所見つかりました。南側の大型のもの(第1主体部)が先に造られたと考えられますが、どちらも古墳の中央にはないことから、当初から2ヶ所の埋葬施設を設置することを計画していたものと考えられます。(写真11)



写真11 1号古墳の埋葬施設全景(東から)

第1主体部は、長方形の土坑内に、遺体を木棺におさめて頭を東にして安置し、棺の周りに石を配した後に埋葬したと考えられます。石で囲われた内法は、長さ2.7m、幅0.5mで、鉄製の剣を遺体の左に、大刀を右に置いています。棺外の南側の石組みからは鉄鍬が出土しました。なお、木棺、人骨・歯は残っていませんでした。(写真12)



写真12 第1主体部の遺物出土状況(北から)

第2主体部は、長方形の土坑の中に小型の石室を組んで、遺体を直接おさめた「たてあなしきしうせつかく 竪穴式小石槨」と呼ぶ埋葬施設で、石槨の内法は、長さ1.8m、幅0.4mです。遺体をおさめた後に、大型で扁平な5枚の石で蓋をし、粘土で隙間を埋め、さらに石で覆っていました。石槨東寄りの床面からガラス製の勾玉と小玉が出土しており、頭を東にして埋葬されたものと考えられます。



写真13 第2主体部の天井石(北から)

副葬品からみて、第1主体部は男性、第2主体部は女性が葬られたと考えられます。

(主任調査研究員杉山秀弘・山中豊)

■「甲を着た古墳人」、1号甲、2号甲の調査

「甲を着た古墳人」が身につけていた甲が1号甲、その西で発見されたものが2号甲です。発掘調査によって1500年間の眠りから覚めた甲と人骨は貴重な情報を多く有しているため、厳寒期の野外に残しておくことは、損壊が進むことが予測できたので、すべきではありませんでした。そこで、平成24年12月の現地説明会終了後に、周囲の土ごと切り取って、事業団の保存処理作業室に運び込み、以後室内での調査を続けています。

【「甲を着た古墳人」と1号甲】

九州大学の田中教授の指導のもと、四肢骨の調査が行われました。火砕流の土砂を少しずつ取り除くと、細かな手足の指の骨がよく残っていました。膝をついて腰を上げ、両手を頭の横に置く死亡時の姿勢が明らかになったのです。骨の周りには土の色の違いから肉体情報の可能性がある痕跡もわかりました。田中教授によれば裸足ではなく、履き物を着用していたとのことでした。

火砕流により死亡した「甲を着た古墳人」の姿は、痛ましく、生々しいものでしたが、平成25年3月に一般公開をしました。多くの方が慰霊の念を胸に、見学されました。(写真1)



写真1 四肢骨の詳細調査の状況

その後は、甲の背面を切り離して、甲の内側の調査を進めましたが、背骨や肋骨が甲前面の内側に落下した状態で残っていました。

調査後に骨を取り除いた1号甲前面の内側からは新たな発見がありました。第一の発見は腹部内面に布の痕跡が残っていたことです。これは甲の裏地あるいは「甲を着た古墳人」の衣服の一部と考えられます。今後の調査で、布の材質、糸の紡ぎ方、布の織り方が明らかになります。生地の種類もわかるかもしれません。古墳時代の服飾を

解明できる貴重な資料となるのは間違いありません。(写真2)



写真2 1号甲腹部内面の布痕跡



写真3 1号甲腹部内面下部の刀子と砥石

第二は、鹿角製の柄の着いた刀子(ナイフのような小刀)と、その刃を研ぐための砥石の発見です。砥石には小さな穴が穿いており、ひもを通して身に付ける提げ砥と考えられます。二点の遺物は接した状態で見つかりましたので、一組の道具として、甲の下の衣服の帯に提げ、発見場所からは身体の正面左の腰に付けていたことも推定できます。(写真3)

人骨の調査を優先させるため、1号甲は二分割せざるを得ませんでした。調査の過程で撮影したCTスキャンの合成画像から、前面の一部が閉じていない甲の全体像を知ることができました。(写真4)



写真4 1号甲のCTスキャン画像

【「甲を着た古墳人」の冑の発見】

国宝の武人埴輪は甲と冑を身に付けた姿を表しています。金井東裏遺跡の「甲を着た古墳人」も冑を持っているのではないかと大きな期待がありました。ところが、現地調査では発見することができませんでした。ところが、頭骨のCTスキャン撮影で、立派な冑が頭の真下にあることがわかりました。(写真5)

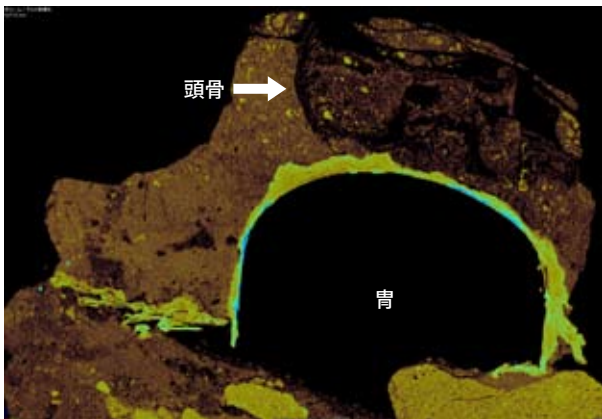


写真5 「甲を着た古墳人」の頭骨とその下の冑
(頭部CTスキャンの断面画像)

冑は横矧板鋌留衝角付冑で、带状の鉄板4枚で一方が尖った卵形の鉢を作り、鉢の頂部から正面部を伏せ板で押さえて仕上げます。尖った方が正面です。右頬当が内側に巻き込まれ、左頬当と後頭部を保護する綴が広がった状態でした。

(写真6)

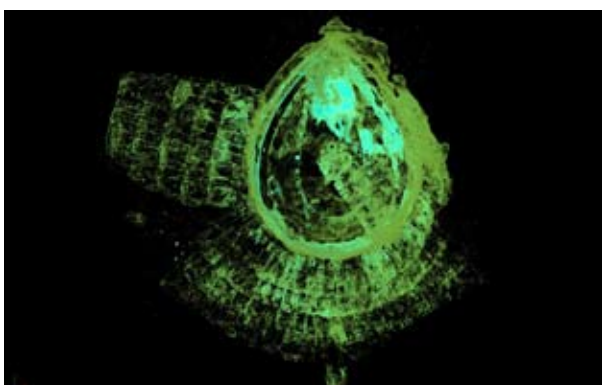


写真6 冑のCTスキャン画像(上から)

写真5の茶色の部分は榛名山噴火に伴う火砕流です。冑は伏せた状態で地表にあり、内部には火砕流は入り込んでいません。冑の頂部に「甲を着た古墳人」の顔面があります。冑の正面は「甲を着た古墳人」から見ると手前を向いていました。明言できませんでしたが、冑を地面に置いたのか、又は落ちたのか。頭を冑に乗せたのか、倒れた場

所に冑があったのかは、亡くなる直前の「甲を着た古墳人」の行動を考察するときの重要事項であり、今後に検証すべき大きな課題となっています。

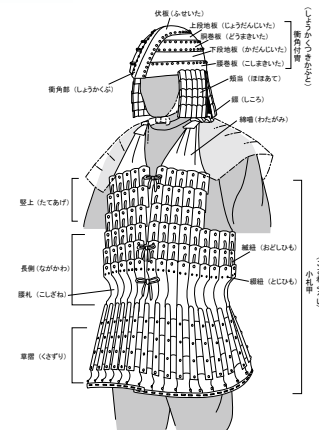


図1 「甲を着た古墳人」の復元図

【2号甲の調査 日本初の骨製小札の出土】

2号甲は、すぐそばで発見されたことから、「甲を着た古墳人」の所有物だった可能性が高いと思われます。この2号甲からは大発見がありました。金井東裏遺跡出土の2領の甲は、「小札」と呼ばれる小さな板をつなぎ合わせて作られているので、小札甲という型式に属するものです。国内で見つかった小札甲の小札はすべて鉄製のものでした。ところが、2号甲の腹側の一部に骨製の小札が使用されていたのです。東アジアでは、韓国で一例が知られているだけで、もちろん日本初の発見となります。

骨製小札は錆びませんから1枚の大きさは長さ6.6cm、幅3.0cm、厚さは0.3cmであること、小札を綴じるための穴が、小札の下から順に3個・2個・2個・2個と規則的に穿けられ、三段の構成になっていることもわかりました。(写真7)



写真7 2号甲内部から出土した骨製小札

CTスキャンでは錆の様子も読み取れます。画像では痛んでいないように見えても、もろい部分もあるため、甲冑の調査は慎重に進めていますが、冑が姿を現す日が待ち遠しく、空洞になっている冑の内側から新発見があるのではと期待もふくらみます。(専門調査役 西田健彦)

『田口下田尻遺跡』

上武道路の終点部の発掘調査終了

上席専門員 菊池 実・主任調査専門員 藤井義徳

上武道路は埼玉県熊谷市から群馬県前橋市までの総延長40kmの国道17号バイパスです。群馬県内は太田市尾島から前橋市田口町までの約35kmの区間ですが、ここは埋蔵文化財が最も多く分布している所で、道路建設地内の埋蔵文化財で現状保存ができないものは、工事着手前に発掘調査して、記録により保存を図ることとしました。

本格的な発掘調査は昭和49（1974）年1月から開始されました。当初は群馬県教育委員会が発掘調査を担当していましたが、昭和53年7月からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が主体となり今日まで継続して調査をしてきています。

上武道路は埼玉県側から逐次供用されてきたので、最後に工事が残った区間は、県道前橋大間々線から国道17号までの区間の8工区でした。（図1）この区域は赤城山の南麓部分にあたり、埋蔵文化財も極めて濃密に分布し、発掘調査を必要とする遺跡の数は30ヶ所ありました。平成18（2006）年7月から8工区間の発掘調査を始め、平成25年8月に発掘調査が終了しました。上武道路の発掘調査開始からちょうど40年に当たっていました。

これにより80ヶ所を超す上武道路建設関連の埋蔵文化財の発掘調査が完了したことになります。そこで、最後の遺跡となった田口下田尻遺跡の調査成果を速報することとしました。

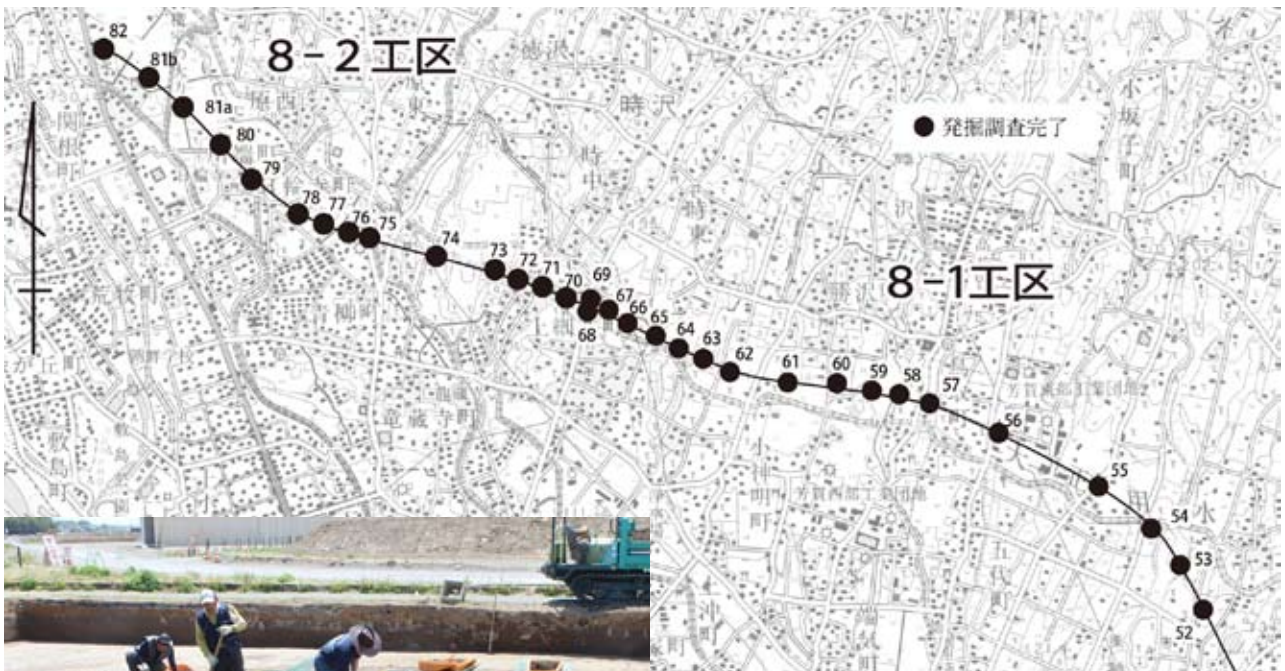


図1 上武道路8工区遺跡位置図

田口下田尻遺跡は前橋市の北部、田口町にあります。利根川の東で桃の木川の自然堤防上に立地しています。調査地は国道17号線のすぐ東側で、上武道路関連の最後の調査となりました。

写真1 天明泥流被害からの復旧跡の調査

【江戸時代】 天明三(1783)年の浅間山噴火で発生した天明泥流被害からの復旧跡(写真1)が、検出されました。それは調査区の東側からで、堆積した泥流土層の上から溝を掘り、掘り出した流土とその下の耕作土を入れ替えた作業の跡を示すものです。同一規格の溝が整然と並んでいることから、共同で計画的に復旧作業を行ったことがわかります。

泥流に埋もれた田畑の復旧跡はこれまでも数多く見つかっています。大災害からの復旧に心を注ぐ当時の農民の姿が目につかぶようです。

【奈良・平安時代】 天明泥流被害復旧跡の検出面から、さらに30cmほど掘り下げたところには、奈良時代から平安時代にかけてのムラの跡が見つかりました。竪穴住居59軒、掘立柱建物5棟、土坑(大きな穴で用途は様々) 152基、ピット(柱穴のような小さな穴)154基、溝8条を発掘調査しました。

竪穴住居は調査区西側の、標高のやや高い場所に集中し、そのほとんどは重なり合っていました。このことは継続的にムラが営まれたことの証しであり、大きなムラの存在をあらためて浮き彫りにしてくれました。



写真2 焼失住居の調査(黒く見えるのは炭化した木材)



写真3 炭化材を取り上げる様子

住居の中には焼け残った柱材などが多数出土した火災を受けた焼失住居と考えられるものもありました。(写真2・3)

炭化した柱材の樹種を調べたところ、スギ、ヤナギ属、クリ、モモ、キハダ等が建築材として使用されていることがわかりました。

このほか、多量の鉄滓や鍛造剥片、羽口などが出土した鍛冶工房跡も見つかっています。鍛冶工房は平安時代にわたって継続的に営まれていたことも追認できました。

緑釉陶器の出土数は県内でも屈指のもので、それらを所有できるような有力者が居住していたことがわかりました。(写真4)



写真4 緑釉陶器の碗の出土状況



写真5 鉄製紡錘車の出土状況

このほか、鉄製の紡錘車(写真5)も住居から出土しており、製糸に関連する生業があったことも判明しています。

本遺跡を含む地域には、平安時代の中頃(西暦10世紀代)に、有力者の存在が想定される大規模なムラがあったことは、これまでの調査から判明していましたが、今回の調査ではそれをさらに裏付ける結果が得られ、上武道路最後の遺跡にふさわしい大きな成果を上げることができました。

『宇貫北沖遺跡』

玉村町南部に残る火山災害の痕跡

宇貫北沖遺跡は、佐波郡玉村町宇貫にあります。県立女子大学に隣接する群馬県下水道事務所の水質浄化センター施設工事に伴い、平成25年1月から同年10月まで、約23,000㎡の広大な面積の発掘調査を行いました。その結果、幾度となく当地を襲った災害の爪痕と、復興に向けた先人の努力のあとが見つかりましたので、紹介します。

【縄文時代以前】 約12,000年前に起きた浅間山噴火以前の遺跡周辺の地形は、わずかな起伏が見られ、低地部では白色粘土の堆積するじめじめした土地であったようです。この噴火以降、やや乾燥した土地へと変わり、数多く見つかった倒木の根株痕から雑木林のような状態になっていた様子が推定できます。

縄文時代には少量ですが土器の破片や黒曜石の細片、石鏃などが出土しており、縄文人の狩猟・採集場所になっていたと考えられます。

【古墳時代】 当地に集落が営まれ始めるのは、古墳時代前期の西暦4世紀代と考えられます。本遺跡の南東にある上之手八王子遺跡には、その頃の住居があるので、本遺跡で見つかった溝や畝(写真1)は、上之手八王子遺跡の人々の手によるものとも考えられます。この開墾された畝地も6世紀代の榛名山二ツ岳の噴火後に発生した泥流によって低地部を埋め尽くされ、耕作できなくなったことが分かりました。

【平安時代】 その後、この泥流に埋め尽くされた低地は、いつの頃からか水田化され、耕作が再開されたようです。12世紀初頭の水田は、東西南

上席専門員 齊藤利昭・主任調査研究員 小野隆

北方向に整然と畔をもつ条里制水田区画になるとともに、微高地の一部は削られて平坦化され、最初の圃場整備が行われたことを示しています。

この水田も天仁元(1108)年の浅間山噴火による火山灰で埋め尽くされ、耕地は壊滅状態となります。しかし、人々はこれに負けることなく、火山灰に覆われた水田面にスコップ状の農耕具(写真2)を打ち入れ、火山灰と水田耕作土を混ぜ、耕作を再開しました。



写真2 平安時代の水田面を掘り返した農具痕

【江戸時代】 最後の大災害が江戸時代の天明三年(1783年)の浅間山大噴火です。大量の火山灰が降り積もり、農地は大被害を受けました。この時は、田畑に降り積もった灰を一か所に集め、短冊状に細長く掘った穴に埋め込み、その上に穴を掘るときに発生した土をかぶせる「天地返し」が用いられ、耕作が再開されました。(写真3)その時に作られた水路は今も使われ、地域の農業水利として重要な役割を果たし続けています。



写真1 古墳時代の畝跡と溝群



写真3 天明三年の火山灰を廃棄するための窪み

『古墳時代の火山災害と金井東裏遺跡』

甲を着た古墳人からのメッセージ

専門調査役 西田健彦

調査遺跡発表会は6月23日(土)に、高崎市文化会館ホールで開催しました。「甲を着た古墳人からのメッセージ 古墳時代の火山災害と金井東裏遺跡」の副題を付け、渋川市の金井東裏遺跡に焦点を絞った内容としたことから、多数の参加者がありました。(写真1)

始めに、当事業団職員の坂口一が「群馬県の火山災害と



写真1 会場入口のパネル展示コーナー

考古学」と題して、群馬県内の古墳時代の火山噴火による被災状況を、代表的な遺跡を例に報告しました。さらに、復興と土地利用の変遷の分析は、当時の集落像の復原にとどまらず、現代の防災システムについて貴重な情報を提供していることを論じました。

次いで、同じく事業団職員の桜岡正信が「金井東裏遺跡で発見された古墳人」と題する報告をしました。その中で、6世紀初頭の榛名山の噴火では、数回の噴火が発生していて、それに伴う火山灰などの堆積物は15のユニットに区分できるとの火山学の成果を紹介するとともに、「甲を着た古墳人」を含めた4名を死に至らしめたのは、3番目の火山堆積物をもたらした火砕流であったことを報告



写真2 シンポジウムの司会と報告者



写真3 シンポジウムのパネリスト
(左から田中教授、土生田教授、右島理事)

しました。

その後、パネリストとして「金井東裏遺跡出土甲着装人骨等調査検討委員会」の委員である九州大学大学院田中良之教授、専修大学土生田純之教授、当事業団右島和夫理事のお三方を迎えて、当事業団職員の徳江秀夫を司会にシンポジウムを開催しました。(写真2・3)

この中で、田中教授は、12月以来続けて来た人骨に関する詳細調査の結果に基づいて、全身骨格が残存していた1号人骨(「甲を着た古墳人」と3号人骨(「首飾りの古墳人」)の死の直前の姿勢や倒れ方がどのようであったかについて、臨場感あふれる説明をされ、聴衆を魅了しました。

土生田教授からは小札甲を始めとして鉄矛、鉄鎌などの武器武具類は、もしもこれが古墳の副葬品ならば、全長100m級の前方後円墳の副葬品に匹敵する質と量を備えており、「甲を着た古墳人」の身分が高かったとの指摘がありました。さらに、金井東裏遺跡の出土品は、古墳の副葬品と異なり、「生の資料」として実際の使用状況を語れる点が重要であるとの認識を示されました。

右島理事からは5世紀後半の榛名山東麓の古墳の中には墳丘や墓室の形態・副葬品の一部に朝鮮半島との関連を強く示すものがあるとの報告がありました。さらに当時としては新式で機能的な小札甲の全国的な分布状況からは近畿地方と関東地方、中でも上毛野の優位性が認められること、この背景にはヤマト王権と東国との間に密接な関係が結ばれていたことがあり、密接な交流を可能にしたのが大陸からのウマの導入であり、ウマ生産には渡来人の力が不可欠であったと結論づけました。

掲示板

普及課からのお知らせ

◆平成26年4月1日から体験学習の教材費を次の通り変更いたしますので、お知らせします

	教材名	単位	3月末日までの単価	4月1日以降の単価
①	ふつうの勾玉	1セット	200円	210円
②	楽らく勾玉	1セット	250円	260円
③	琥珀の勾玉	1セット	1,000円	1,030円
④	縄文アクセサリー	1セット	200円	210円
⑤	カラー粘土の勾玉	1セット	200円	210円
⑥	火おこし用火切り臼	1台	150円	250円
⑦	火おこし用火切り杵	1本	150円	220円
⑧	土器・はにわ作り用のテラコッタ粘土	1kg	200円	210円
⑨	土器・はにわ焼き上がり連絡用はがき	1枚	3月までの連絡 50円	4月以降の連絡 52円

連絡先：普及課
☎0279-52-2513

表紙解説

金井東裏遺跡の土器集積遺構

本文中でも紹介している金井東裏遺跡の4区で発見された土器集積遺構です。榛名山噴火に伴う火砕流を取り除く作業をしています。作業員の後ろに見える線引きされた土層が火砕流です。火砕流が集積された土器を覆い尽くしていることがわかります。

集積の状態は土器の杯を何枚も上向きに重ねてひとまとめにし、それらが何組も並べられています。鉄製品が入った杯も写っています。鉄器以外にも勾玉、ガラス玉、石製模造品が、杯の中から数多く発見されました。これらの品々を用いて祭祀が行われていたわけですが、祭祀の実態解明には根気強く研究することが必要です。

本誌は、一般向けの埋蔵文化財情報誌です。
お問い合わせは、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課までお願いします。

「埋文群馬」No.58
平成26年3月31日発行
編集・発行 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 渋川市北橘町下箱田784-2
☎0279-52-2513
印刷 上毎印刷工業株式会社